中国古典文学大系 53

戯曲集 下

田中謙二 編
岩城秀夫 訳

平凡社

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

田中謙二（たなかけんじ）　大正1年滋賀県生。京都大学文学部卒。専攻　中国文学。京都大学人文科学研究所教授。主著訳書『龔自珍』（岩波書店・中国詩人選集）『長安城中の少年』（平凡社・東洋文庫）『史記』（朝日新聞社・中国古典選・共著）「元代散曲」（平凡社・中国古典文学大系・宋代詞集）

岩城秀夫（いわきひでお）　大正12年京都生。京都大学文学部卒。山口大学文理学部教授。専攻　中国文学。主著訳書『唐伯虎伝』（筑摩書房）『板橋雑記・蘇州画舫録』（平凡社・東洋文庫）

中国古典文学大系　全60巻

戯曲集（下）　第53巻

昭和46年12月22日　初版第1刷発行
昭和52年6月1日　初版第5刷発行

編者　田中謙二

発行者　東京都千代田区四番町4番地　下中邦彦

発行所　郵便番号　102　東京都千代田区四番町4番地　振替・東京8-29639　株式会社　平凡社

不良本のお取換えは直接小社サービス課までお送り下さい（送料は小社で負担します）。
定価は外箱に表示してあります。

印刷　東洋印刷株式会社
製本　株式会社　石津製本所

© 株式会社　平凡社　1971　Printed in Japan

目次

還魂記（かんこんき）

湯頭祖作
岩城秀夫訳

第一幕　標目……三
第二幕　懐いを言う……四
第三幕　娘に教訓す……七
第四幕　腐儒の歎き……一一
第五幕　家庭教師を招く……一三
第六幕　不遇を歎く……一七
第七幕　女子の学問所……二〇
第八幕　農事の奨励……二五
第九幕　静かな庭園……三一
第十幕　夢に驚く……三六
第十一幕　慈母の戒め……四四
第十二幕　夢のあとを尋ねる……四五
第十三幕　別　れ……五三
第十四幕　絵姿を画く……五六
第十五幕　金人の偵察……六三
第十六幕　病のわけを問う……六四
第十七幕　道姑の祈禱……六八
第十八幕　邪病の診察……七二
第十九幕　女　賊……七六
第二十幕　夭折を悼む……八〇
第二十一幕　苗舜賓に会う……八九
第二十二幕　旅中の寄寓……九四
第二十三幕　冥府の裁判……九七
第二十四幕　画を拾う……一〇八
第二十五幕　亡き娘を憶う……一一
第二十六幕　画像の鑑賞……一一五
第二十七幕　魂の出遊……一一九
第二十八幕　幽魂とのちぎり……一二六
第二十九幕　他人の疑惑……一三四
第三十幕　歓楽の邪魔……一三八
第三十一幕　防備を整う……一四三
第三十二幕　幽魂と誓う……一四六
第三十三幕　秘密の相談……一五七
第三十四幕　薬をさぐる……一六三
第三十五幕　回　生……一六四
第三十六幕　馳落ち……一六九
第三十七幕　変事に驚く……一七七
第三十八幕　淮揚の警報……一八〇
第三十九幕　杭州に行く……一八三
第四十幕　主人を尋ねる……一八五
第四十一幕　受　験……一八九
第四十二幕　鎮台を移す……一九五

第四十三幕　淮安の防禦……二〇〇
第四十四幕　さしせまる苦難……二〇六
第四十五幕　間　諜……二一一
第四十六幕　賊を屈す……二一五
第四十七幕　包囲を解く……二二〇
第四十八幕　母と子の奇遇……二二七
第四十九幕　淮安の宿泊……二三五
第五十幕　宴席をさわがす……二四〇
第五十一幕　試験の発表……二四八
第五十二幕　状元を捜す……二五二
第五十三幕　拷　問……二三五
第五十四幕　吉　報……二六五
第五十五幕　団　円……二七〇

桃花扇

孔尚任作
岩城秀夫訳

序　幕　老役人の独白……二八六
第一幕　講釈を聞く……二八八
第二幕　歌の稽古……二九五
第三幕　孔子廟の騒動……三〇〇
第四幕　芝居の批評……三〇五
第五幕　秦淮の遊興……三一一
第六幕　香君のお櫛あげ……三一八
第七幕　嫁入道具を突返す……三二四
第八幕　水楼の文会……三二九
第九幕　軍隊を鎮撫す……三三六
第十幕　手紙で難を救う……三三九
第十一幕　柳敬亭軍門に到着……三四三
第十二幕　秦淮の別れ……三四九
第十三幕　皇帝の崩御を哭す……三五四
第十四幕　奸策を阻止す……三五九
第十五幕　福王の擁立……三六四
第十六幕　まつりごと始め……三六八
第十七幕　媒酌を拒む……三七三
第十八幕　席次争い……三七九
第十九幕　黄金壩の合戦……三八四
第二十幕　鎮台を移す……三八七
続第二十幕　世間話……三九二
第二十一幕の序　老役人の独白……三九六
第二十一幕　宰相に媚ぶ……三九九
第二十二幕　香君、操を守る……四〇四
第二十三幕　扇の手紙……四〇九
第二十四幕　宴席の罵倒……四一五
第二十五幕　俳優選び……四二三
第二十六幕　欺し討ち……四二九
第二十七幕　舟中の邂逅……四三三
第二十八幕　画に題す……四三九
第二十九幕　社友逮捕さる……四四六
第三十幕　張薇の出家……四五三
第三十一幕　檄文の起草……四五六
第三十二幕　先帝を拝す……四六四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三十三幕　獄中の邂逅……四七〇
第三十四幕　坂磯の防禦……四七五
第三十五幕　軍中の誓い……四七九
第三十六幕　都落ち……四八三
第三十七幕　天子を強奪す……四九〇
第三十八幕　史可法の最期……四九五
第三十九幕　仙道の修行……五〇〇
第四十幕　追善供養……五〇五
第四十幕後場　残んの香……五一四
解説……五三五

還魂記

湯顕祖 作
岩城秀夫 訳

登場人物

柳夢梅	書生、柳宗元の子孫
杜麗娘	杜宝の娘
杜宝	南安の太守、杜甫の子孫
甄氏	杜宝の妻
陳最良	老儒生、杜家の家庭教師
春香	麗娘の侍女
石道姑	梅花観の守りをする尼
小道姑	石道姑の弟子
苗舜賓	欽差識宝使、のち試験官
駝孫	郭橐駝の子孫
韓子才	柳夢梅の友人
その他	石道姑の甥や李全とその妻、また僧など

第一幕 標目(題)

説明役（登場）

忙しき場にては袖にされ
閑なるところにぞ住まる
さまざまに思いめぐらせど
歓を得るところなし
白昼に消磨す　断腸の句
訴える術なきは浮世のつね
玉茗堂の朝な夕な
紅燭のもと　人の姿写せば
江山も詩興をたすく
もし相思の人の相負かずば
牡丹亭に三世の縁あらん

太守杜宝の娘なる麗娘、春の陽に浮かれ歩き、夢に見し書生の、柳の枝を折りしより、傷春の思いをおこす。絵姿を描きとどめ、梅花道院に葬られて凄涼し。三年ののち、柳夢梅あらわれ、歓会をとぐ。果せるかな、回生ののち夫婦となり、臨安に受験に赴きしに、あたかも寇の淮揚に起こり、杜公包囲に苦しむ。麗娘は驚きおそれ、柳生に探りに行かしめしに、却って杜宝に疑われ怒をかいぬ。恋のたてひき、拷問に苦しむ折しも、状元及第のしらせありたり。

〃夢に丹青記を写し
梨花槍(注三)を説き下す
回生せる女を偸み載せ
状元郎を悪しざまに打つ〃

注

一　標目　戯曲全篇の総序のごとき意味をもつもので、明・清の南方系の戯曲にみられる。通常、制作の趣意や作品の梗概を説く。副末開場・家門などと書かれることもある。

二　玉茗堂　作者湯顕祖の書斎の名。

三　梨花槍　第四十七幕「包囲を解く」に登場する李全の妻を指す。李全の妻は梨花槍の名手であった、と『宋史』の「李全伝」にみえる。

第二幕　懐いを言う

柳夢梅（登場）

河東の旧族　数ある中で
柳氏こそは最たる名門
いかなる星かをいうなれば
張宿(注一)より鬼宿(注二)までもそなわりしに
幾世ののちか　貧乏儒者
雨風すらも　しのぐすべなし
「書のうちに富貴あり」など
みだりには言うなかれ
玉の顔　黄金はいずくぞ
貧窮は心を暗くす
ままよ　浩然の気を養わん

〃刮り尽す　鯨鬣背上の霜(注一)
寒儒は偏えに喜ぶ　南方に住むを
造化三分の福により
詩書一脈の香をつぐ
よく壁をうがって
隣家の明りをとり
髪を梁に結んで
睡魔をしりぞけ

絢爛の文章綴りあげん
必ずや蟾宮の桂を斫り得て
人の世の玉斧の長きを信ぜん〃

わたしは姓を柳、名を夢梅、あざなを春卿と申して、柳州の司馬であった唐の柳宗元の子孫でございます。嶺南（広東）に住みつき、父は朝散大夫の職にあり、母は県君の封号をいただいたというのに、（歎く）残念なことに、わたしは幼少より身寄りもなく、細細と暮らして参りました。しかしお蔭で今では成人して、二十歳もすぎました。生まれついて聡明で、郷試にも及第しましたが、時勢にあわず、飢えと寒さから逃がれられないのは、口惜しいことでございます。幸いご先祖の柳州公（柳宗元）が郭橐駝を連れて来られて、柳州の役所で花や果物を栽培され、駝孫をおのこし下されたので、

柳夢梅　夢に見た美人を憶う

かれもわたしに随って広州で樹木を植え、助けあって生活しております。とは申しましても、これは男子たるものの終局の場ではございません。毎日もの思いにふけっていましたところ、半月ばかり前に、ふと夢を見ました。夢の中で花園に行きますと、梅の花の下に一人の美人が立っておりました。背は高からず低からず、送るがごとく迎えるがごとくで、その美女は『柳さま、柳さま、わたしにお会いになりましたからは、姻縁の分、ご栄達の時がございましょう』と申しました。わたしはこれをきっかけに、名を夢梅と改め、春卿をあざなといたしました。

〃夢の短きも夢の長きも　ともにこれ夢
年来り年去る　これ何れの年ぞ〃

というものでございます。

名を改め　あざな換うればとて
美人はいまだ知るによしなし
佳期を定めんとて
月の桂をのぞめど
柳夢梅は空言をいわず
なお怕るるは
嫦娥の嫉妬に　花の凋み
梅の実の酸くして
柳眉に皺よせんこと
すべては酔えるがごとし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

螢の無くば　隣家の壁をうがつ
東の牆より人の窺うは　意のまま
春光の暗やかに黄金の柳をわたらば
雪の心　にわかに白玉の梅を開く

意を得て章台に馬を走らせば
柳の糸の翠　百花の魁をば得ん

ところで友人の韓子才は韓退之の後裔で、趙佗王台に寄寓している。かれは祭祠を司る身分ではあるけれども、談論の徒だ。ひとつ訪ねてみよう。

〃門前の梅と柳は　春暉に爛やき
夢に君王に見え　覚めてのち疑う
心は百花の開きて未だ得ざるに似たるも
身を托するは須らく万年の枝に上るべし〃

注

一　張宿・鬼宿　いずれも二十八宿の一。張宿は南方の朱鳥七宿の第五宿で、鬼宿は同じく第二宿である。

二　鯨鼇背上の霜　科挙を受験して状元に及第するのを、鼇頭を占めると称した。ここでは苦労して勉学しながら、却って鼇の背に霜を生じた、すなわち貧寒であることをいう。

三　柳宗元　あざなは子厚、唐宋八大家の一人。

四　朝散大夫　官名のみで職掌のない大夫。文武の官で徳のあるものに与えられた。

五　県君　婦人の封号。婦人を一県の君とする意である。

六　郭橐駝　柳宗元の『種樹郭橐駝伝』にしるされているすぐれた植木職人。背が円くて駱駝のようであったという。

七　章台　秦漢時代の宮殿の建築物で、この下に章台街があった。漢の張敞が宮中を退出したのち、便面（扇の類）を鞭にして馬を章台街に走らせたこと、『漢書』の伝にみえる。

八　韓退之　名は愈。柳宗元とともに唐宋八大家の一人。

九　趙佗王台　越王台のこと。現在広州市の北にある。秦末の趙佗（のちの南越の武王）の築いたものと伝えられる。

第三幕　娘に教訓す

杜宝（登場）

西蜀の名儒　南安の太守
幾たびか都に　また江湖
紫袍金帯の身は
功業の無きにあらねど
白髪の首　回らすにたえず
万里橋西に退隠の意あれど
君許したまわで
太守の身の
去留定めがたし

〃一生の名宦　南安に守たり
尋常の太守として看ることなかれ
到来して只だ飲む　官中の水
帰去して惟だ看る屋外の山〃

わたしは南安の太守で、あざなは子充、唐の杜甫の子孫だ。巴蜀（四川）に流落して、年も五十を過ぎた。思えば二十歳で進士に及第、三年を地方官としておくり、政治の好評は人々の間にひろまった。内には夫人の甄氏がいるが、魏朝の甄皇后の嫡派で、峨嵋山に住み、代々賢徳の夫人を出している家柄。娘が一人あるが、才貌は端正で妍やかじゃ。名を麗娘と申して、まだ婚約はしておらぬ。思うに由来淑女で書を知らぬはない。今日は政務に暇もできたので、ひとつ夫人を喚び出して、このことを相談してみよう。

〃中郎は学富みて単とりの女に伝え
伯道は官貧しくして　更に男児の少なし〃

というものだ。

甄氏（登場）

甄妃は洛浦に
嫡派は西蜀より来りて
南安の太守に封ぜらる

（杜宝を見る）

杜宝

〃老いて名邦に拝せられしも　何の徳もなく

甄氏

妾も封誥に沾おえど　何の功かある

杜宝

春の来りてより　閨閣は閑いくばく

甄氏

また長に花陰に向いて女工を課す〃

杜宝　女工の点では、娘は人並みすぐれた器用さじゃが、古今の賢女をみるに、詩書を知るものが多い。他日、書生に嫁ぐようになれば、話のそりも合うようにいたしたいが、そなたの考えはどうかな。

甄氏　仰せの通りでございます。

（侍女春香、酒台をもち、麗娘に随って登場）

杜麗娘

嬌（なまめ）かしき鶯の語りかけんとし
眼のあたり　春のさかりぞ
萠えそめし草の心や
春陽のごとき父母のめぐみ
いかにこたえん

（父母を見て）

ご機嫌よろしゅうございます。

杜宝　これ娘や、うしろに酒肴を捧げておるのは、どういうことか。

杜麗娘　（ひざまずいて）今日は春の眺めも明媚（うるわ）しゅうございますので、父上様母上様には、奥のお座敷でおくつろぎ下さいますよう。わたくしがお酌をして、ささやかながらご長寿をお祈り申したく存じます。

杜宝　いや、それはありがとう。

杜麗娘　（酌をする）

父母の機嫌うるわしきは
娘には限りなき歓び
太守に百歳の春の光あれ
天禄の美酒をすすめん
ちちははの寿をば祝わん
子の生まるること遅けれど
蟠桃（ばんとう）の熟すまで
守り育て下されし

四人

しばし酒壺を提げ
花の下　竹生うるあたり
鳳凰の雛ともなわん

杜宝　春香、娘にも酌をいたせ。

わが家は杜甫の血すじ
さすらいの果てに老いこみ
妻子にもはずかしき思い

（涙をおとす）

奥や、わしは子美公（杜甫のあざな）に比べても、まだ憐れじゃよ。

かれには男児ありて
父の詩句をよむ
われには嬌（みめよ）き娘
母を真似て眉を描く

甄氏　あなた、いらいらなさいますな。もしも佳（よ）い壻を迎えることができましたら、息子と同じではございませぬか。

杜宝　同じだろうかね。

甄氏

古語にはいう
娘こそ家名をあぐと

なに故に不平をのたもう
中年となれるばかりぞ

四人

しばし酒壺を提げ
花の下　竹生うるあたり
鳳凰の雛をともなう

杜宝　麗娘や、台盞を片付けなさい。（麗娘退場）　ああこれ春香、そちにたずねるが、あれは終日部屋のうちにて、なにをいたしておるか。

春香　お部屋では刺繍でございます。

杜宝　随分と刺繍をしたであろう。

春香　刺繍をおわると、棉をつむがれます。

杜太守　麗娘に教訓を垂れる

杜宝　どのような棉かな。

春香　睡眠（眠と棉とを掛ける）でございます。

杜宝　いやはや、これはどうじゃ。奥や、「長に花陰に向いて女工を課す」とさきほど聞いたばかりだが、娘に気儘に昼寝などさせているとは、なにが躾だ。娘はどこじゃ。

杜麗娘（登場）

お父上様、ご用でございますか。

杜宝　なにがなし春香にたずねたところ、お前は昼間から眠っているというが、どういうわけじゃ。もし刺繍の余暇があるなら、書棚の書籍をよむべきじゃぞ。いつの日か他家に嫁いだとき、書を知り礼を知っておれば、親としても鼻がたかい。これは母親の教育の至らぬためじゃ。

官吏の身の清貧なれど
詩書のために身を誤らず
なんじながく客のごと
鄭重に扱われしが
いつの日か
家事にあたるべきに
父たるものは無関心
母は女子の鑑といい得るや

甄氏

娘を眼の前にして
母たるもの
心をつかい身を疲らせ

掌中の珠いとおしみ育て
殊のほかなる美玉となしぬ
意味深きことば心してきけ
よもや文字知らぬにはあらじ

杜麗娘

知府なる父母のもと
嬌きて愚かなる習い
ぶらんこと絵画と
暇なるままに写しとる
鴛鴦の刺繍の下絵
今よりはお茶のあと
食事のあとも余暇もとめ
玉鏡台の前に書よまん

甄氏　とは申しても、女の先生に講義して頂くのがよろしいでしょう。

杜宝　それでは不充分じゃ。

役所のうちなる住居にて
招く師は学堂の腐儒

甄氏

娘よ　孔子の詩書
いかであまねく読み得ん
ほぼ知るべきは周公の礼

杜・甄

単なる姫君とならば
糸つむぎてあるべきも
謝女・班姫のごとき
才女とはなれかし

先生をたのむのは、困難でない。ただよくもてなさねばならぬが。

奥よ　娘いとしくば
贈り物に心をこめよ
学ある師　招き
食事は清楚なれ
われ国治め家斉うる
ただ数巻の書あるのみ

〃往年何事ぞ　西賓を乞いし
春風を主領するは只だ君に在り
伯道　暮年　嗣子無し
女のうち誰かこれ衛夫人〃

注

一　甄皇后　魏の文帝曹丕の皇后　甄氏をいう。
二　中郎　後漢の蔡邕、あざなは伯喈のこと。著名な学者で中郎将の官になった。娘の蔡琰、あざなは文姫は才女として知られている。
三　伯道　晋の鄧攸のあざな。石勒の乱のとき、甥をたすけるために、自分の子を棄てて逃げたが、それよりのちに子ができなかったので、当時の人は「天道知る無し、鄧伯道をして児なからしむ」といったという。『晋書』良吏伝。

四 封誥　五品以上の官吏の妻のうける封号。
五 周公　周の文王の子、武王の弟。武王の没後、成王をたすけ、礼楽制度を定めた。
六 謝女　晋の謝奕の娘の道韞。王凝の妻。才女として著名。雪の日に叔父の安が何に似ているかと問うた。安の兄の子の朗が、「塩を空中に撒きちらしたようです」といったのに対し、道韞は「柳葉風によって起つ、といった方がよいでしょう」と答えたという。
七 班姫　後漢の班固の妹、名は昭。曹世叔の妻。若くして夫に死なれた。博学で、班固の著わした『漢書』のうち、「八表」と「天文志」は班昭の補うところとされている。曹大家とよばれる。
八 衛夫人　晋の人、名は鑠、あざなは茂漪。書法をもって知られる。

第四幕　腐儒の歎き

陳最良　（老いたる儒者の姿で登場）

燈火の窓べに苦吟す
貧苦のあまり放心の体
試験通らぬ苦しみ
志得ぬはかくのごとし
憐れや　書よむの心にそむき
喘息に年来侵さる

〃咳嗽　病多くして　酒盞にうとく
村童　俸薄くして　厨の煙滅じぬ
いかで知らん　天上に人の住む無きを
春の愁を弔い下す　鶴髪の仙〃

わたしは南安府学の学生の陳最良で、あざなは伯粋と申します。祖父は医者で、わたしは幼いときから儒学の勉強。十二歳のとき定員外で府学に入り、成績がよくて奨学生にしていただきましたが、郷試を受験すること十五回、不幸にも前任の学政が成績劣等と判定して奨学金を停止され、そのうえこの二年は家庭教師の職をはなれまして、衣食にもことかくような次第で、若い連中は口にまかせて、わたしのことを陳絶糧と申します。わたしは医術・卜筮・地の理、なんでも心得ておりますので、またあざなの伯粋を、百雑砕と換え

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com